『接触場面における儀礼的相互行為　接触場面の言語管理研究 vol.14』(2017)pp.1-20

ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的な接触場面での言語行動
－儀礼的な役割をもつ発話機能の比較から－

Characteristics of Persian and Japanese native speakers' linguistic behavior in ritual contact situations: Through a comparison of utterances with ritualistic function

アキバリ・フーリエ（千葉大学，人文社会学研究科）
Hourieh AKBARI(Chiba University,
Graduate School of Humanities and Social Sciences)

Abstract

Based on the data collected on conversations, this paper focuses on the language behavior of Persian native speakers who are mid to long-term residents in Japan, while they interact with the native Japanese speakers in the ritual situations. During the interactions, the Persian native speakers are highly aware of formal language behavior due to the socio-linguistic influence of their mother-tongue. This research takes up natural conversation 36 formal contact situations, as an object of study. In ritual situations, there are speech functions which play different ritualistic roles. These speech functions have been named as fundamental formal speech functions and frequent expressions of 9 fundamental speech functions (greetings-gratitude-admiration-invitation-offer- request-apology-desire-(wish)-offer) have been focused on. On analysis, it was found that Persian native speakers express formal language behavior in the situations which are around three times more than the situations where Japanese native speakers do. Based on the frequent expressions of participants` fundamental ritual speech functions, those situations have largely been classified into 4 groups and an attempt has been made to observe the characteristics of each group.

１．はじめに

本稿では，イラン出身のペルシア語母語話者の儀礼的な日本語使用に焦点を当てる．儀礼とは，一般の定義では，一定の形式にのっとった規律ある行為・礼法のことである Tambiah（1985 : 128）は，儀礼とは「文化的に体系化された象徴的コミュニケーション」（“a culturally constructed system of symbolic communication”）だと述べている．特に本稿で「儀礼的」と定義づけられる接触場面に注目した理由には，筆者の以前の研究（アキバリ 2015）で扱った相互行為において，ペルシア語母語話者と日本語母語話者が，最も互いに不満を感じていたのが，儀礼的な場面であったことがある．主な理由が，ペルシア語話者の独特な言語・非言語行動を含んだ社会的言語行動の「ターロフ」（تعارف, Taarof）である．ペル

シア語母語話者同士のターロフ場面における自然会話での分析結果からは，ターロフ言語行動は「場面性」と発話者同士の「関係性」に大きく左右されていることがより明確となった．また，ターロフ場面（儀礼的場面）でペルシア語母語話者は，儀礼的な役割を持つ多様な発話機能の使用とその連鎖を行うことで，相手との儀礼的行為を調整していることが考察された（アキバリ 2016）．儀礼的コミュニケーションは，機能主義的アプローチと象徴論的アプローチの二つに区別されている（杉島 1997）．そこで本稿では，ペルシア語母語話者と日本語母語話者の自然会話データの相互行為分析をもとに，機能的アプローチに注目する.本研究では,母語のようなターロフ言語行動がない日本の言語社会において，ペルシア語母語話者はどのように儀礼を提示しているのかを明らかにすることを課題とする．特に両話者の儀礼的な発話機能の使用頻度に注目して考察を行う．ここで，本論の目的を以下に示す.

(1) 発話者の儀礼的相互行為が期待される場面内で，参加者（日本語母語話者とペルシア語母語話者）は談話全体の何割で，儀礼的と定義づけられる発話機能を活用しているのか.

(2) ペルシア語母語話者が儀礼的な発話機能を多く表出する場面での発話機能の種類と特徴は何か.

(3) 日本語母語話者が儀礼的発話機能を多く表出する場面での発話機能の種類と特徴は何か.

(4) ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的発話機能の表出頻度が等しい場面の特徴は何か.

(5) 儀礼的な言語行動が期待されるにも関わらず，儀礼が見られなかった場面内の特徴は何か.

2. 先行研究

2.1 インターカルチュラル・コミュニケーションと接触場面研究

近年のグローバル化社会では，移住者や移民等と呼ばれる人々が世界中で多く見られるようになっている．このような人々は，川上(2006， 2009)が述べるように，「空間的」に移動するだけではなく「言語間」も移動すると考えられる．彼らは，生活環境（仕事・人付き合い・ライフスタイル）というマクロなレベルでの変化と，言語環境というミクロなレベルでの変化を同時に体験することから，インターカルチュラル・コミュニケーション（intercultural communication）上の問題に直面する．インターカルチュラル・コミュニケーションは様々な学問領域において研究の対象となっているが，嶋津（2016:293）はこれを国や地域，人種や民族，社会階級や性別，世代や職業などによって異なる文化背景を持つ人々の間のコミュニケーションと捉えており，多種多様なインターカルチュラル・コミュニケーションが存在すると述べている．本論で言うところのインターカルチュラル・コミュニケーションは特に，国を基準とした文化・言語を反映した文化間コミュニケーションを指す.

ネウストプニー（1995）が述べる接触場面研究もその一つである．Neustupny(1985)は，以下のように「接触場面」を定義する．（語訳は村岡（2016）による）.

場面の根本的な区別は，文化内と文化間である．文化内の場面は「母語 native」または「内的 internal」場面，文化間の場面は「外来 foreign」または「接触 contact」場面と呼ぶことができる．1 つまたはそれ以上の場面の構成要素が当該の文化システムに外来であるとき，その場面のコミュニケーションは「母語」場面のそれとは本質的に異なるものとなる．

以上の定義から，本研究で使われているデータはすべて，接触場面内で行われている自然会話である．接触場面で言語が母語でない会話参加者にとって，言語運用能力の制約がある中で，適切かつ十分に情報を伝えなければならないことが大きな課題となる．また，会話参加者の間で，会話の規範や社会・文化的な規範が共有されていない(ファン 2003, 2006)ために，理解や信用を導く基盤が十分でないこともあり得る．一方，谷（2016:149）は，接触場面においては，会話の参加者が，それぞれの社会・文化背景や規範を尊重することが重要である一方で，参加者同士が特定の関係に配慮し，各々の認識を共有し，時に調整を行い，個人間において許容される規範的な行為を築くことも必要であろうと述べている．

近年，日本語母語話者との接触場面に関する研究は，英語母語話者（大石 1996;山本 2014)やシンハラ語母語話者(サジーワニー2008)などといった日本から離れた国々の発話者との言語問題を分析した研究も見られるが，その主な対象は近隣の国々(中国・韓国・タイなど)である(郭 2002; 徐 2006; 楊 2009; 加藤 2010; 袁 2012 など)．だがこれまでの研究では，日本語教育がさかんに行われてきたトルコやイランと言った中東地域の日本語学習者を対象とした接触場面研究は見られていない．そこで本研究では，ペルシア語母語話者が相手との関係や場面に応じてどのように日本語母語話者と言語調整をしているのかを見ていきたい．

2.2 儀礼場面におけるフレーム分析とフェイスの概念

本論では，社会学的アプローチによる Goffman（1974:21）のフレームの概念を用いる．Goffman によれば，フレームとは，人が自ら「いま・ここ」で経験する活動や出来事を組織だった形で理解するにあたって依拠するいわゆる「頭の中」の認知的なスキーマ（図式）だけではなく，同時に人々がコミュニケーション的な道具立てを使い，共同の活動を組織化する際に実際に使われる相互行為的な「状況の定義」である．つまり，その状況でのフレームに対する認識は，ひとりの参加者のみではなく，場面に参加している発話者同士の双方からの同様の理解（今，この状況で自分たちが何を行っているか）が必要とされる．また，相互行為内に存在する様々なフレームの中で，本研究は特に儀礼的行為が見られる場面のフレームに注目する．Goffman はこのような場面を儀式のフレームと呼び，その例として結婚式や葬式，辞令の交付式といった儀礼を挙げ，それは「日常生活の転調ではなく，出来事の転調」であると述べる（Goffman1974:58）．またフレームには，時間的・空間的な枠付けがあり，Goffman 自身が指摘する通り，その枠はそれを構成する相互行為の詳細，とりわけそこで使われるさまざまな境界の表示（たとえば会話における「こんにちは」と「さようなら」）に注目することで同定できると考えられる．

本調査の対象は儀礼的なフレーム内での相互行為であるが，これを平凡な日常会話と比較すると，「マナー」や「その社会における規範」がより強く反映されると考えられる．

Goffman(1967)は，儀礼そのものは，繊細なバランスを必要とすると述べる．感受性が低すぎたり，機転がきかなすぎたり，プライドや思いやりがなさすぎる人は，他者に必要以上に気を使わせるし，社交的すぎる人も長期的にどう調整すればいいかどんな立場で接すればいいかという感情を人に起こさせると指摘している．

儀礼的な状況においては，場面における状況や規範をよく理解しなければ，相互行為の参加者のフェイスが侵害されかねない．Goffman（1967）は，フェイスを特定の接触の間，その人がとっているとみなされるライン[i]によって効果的に主張される積極的な社会的価値，承認された社会的属性の見地から表される自己イメージと定義づけている．よって，フェイスとは，状況によって定義される「プラスの社会的価値をもつ自己イメージのことである．私たちは相手のフェイスを尊重し，同時に自分のフェイスを守り，そのバランスに配慮しながら相互行為を行っていると考えられる．フェイスを保持する儀礼行為には，自己のフェイスの保持を表現する「品行 demeanor」と，他者のフェイスに評価をはらう「表敬 deference」がある．したがって，インターアクションの場において，相手(聞き手)と対人関係を円滑に保ちたい状況では，聞き手のフェイスを保護したり尊重したりすることが重要となる．ここから聞き手のフェイスのために配慮し，その配慮を言語行動で示すことが求められる．本研究の扱う接触場面では，儀礼的なフレームに対する認識の違いが考えられる．また，儀礼的場面における規範が異なると考えられることから，フェイスの侵害が想定される．

3. 調査方法

3.1 調査の概要

本研究で用いるデータは，2014 年 12 月から 2016 年 1 月まで，自然な儀礼的な会話が行われたペルシア語母語話者と日本語母語話者によるさまざまな場面を録音したものである．特に日本語母語話者との儀礼的な接触場面に焦点を当てた理由は，ペルシア語母語話者の母語規範であるターロフ言語行動の転移を想定したためである．ここでは，会話内で儀礼的な会話が行われていると判断した箇所のみ文字化を行った．自然会話の録音手段は二つあり，一つ目はフィールドワーカーである筆者が現場に行きそこでの相互行為を観察する際に IC レコーダーで参加者の会話を録音したものである．二つ目は，筆者がその場に立ち会わずに，IC レコーダーを協力者に渡して会話の開始部から終了部までを録音してもらったものである．実際に会話が行われていた時間は，場面状況，参加者同士の関係性と会話の話題によって，大きな差が見られた．短いものは 1 分ほどの挨拶から，長いものは 2 時間 30 分に及ぶものまである．参加者は接触場面においてはすべて日本語で会話していた．また，文字化は，宇佐美（2011）の BTSJ（Basic Transcription System for Japanese）に従って行っている．

3.2 調査場面

多様な場面での儀礼的行為を考察するため，筆者は日本在住のペルシア語母語話者のコミュニティを検討し，儀礼が行われると想定される場面でデータを収集した．下の表 1 は，自然会話が収録された調査場面とそこでの会話の特徴，場面における参加者の関係性を示したものである．

調査場面の選択方法としては，まずペルシア語母語話者の母語場面において儀礼的行為が多く見られた場面（アキバリ 2016）に比較的近いものを検討した．次にペルシア語母語話者と日本語母語話者が自然な会話をする場面を想定し，協力者に調査を依頼した．その際，彼らの日常生活に密着し，特にイベントや日本人との交流を予定している日程に場面参加の依頼をした．しかし，それが不可能な場合は，彼らにあらかじめ渡してあった IC レコーダーで，日本語母語話者との挨拶や日常会話の録音を各協力者の判断で録音してもらった．また，都内にあるペルシア料理レストランや食料品販売店（スーパー）のオーナーにも問い合わせ，収録の許可を頂いた．本調査では録音された会話の内，合計 36 の会話場面を分析の対象としている．

表１：　調査場面データの詳細

調査場面	場面特徴	会話時間(分)	会話番号	参加者関係	参加者数
スーパー	開始部と終了部の挨拶・値段を聞く	10～15	(2)，(3)	店員 - 客	2名
	レジでの会計中の談話	1～2	(27)，(28)		2名
	食べ物を提供する	3	(1)		3名
レストラン	開始部と終了部挨拶	39	(18)	常連客(店員 - 客)	4名
	料理の注文	3	(19)	常連客(店員 - 客)	2名
		1	(4)	初対面(店員 - 客)	3名
	友人同士の自己紹介	3～8	(6)，(8)	店員－客	3名～4名
	客がレストランスタッフを褒める	3	(7)		2名
	常連客との挨拶	20～32	(10)，(5)		2名
展示会	展示会での値段の交渉	24	(11)	店員－客	3名
フリーマーケット	客が値段を聞き、店員が商品について説明をする	20～60	(21)，(22)	店員－客	2～3名
	ブースを持つ者同士の挨拶と会話	4	(23)	仕事仲間	3名
	開始部と終了部の挨拶，商品の提供	50	(24)	友人同士	5名
	クレームを言う	3	(25)	仕事仲間	3名
クリニック	診察室での会話	3～4	(32)，(33)	医者－患者	2名
近所同士	開始と終了部挨拶・褒め・感謝が表れる	8	(9)	友人	4名
パーティー場面	ホストとゲストが会う際の開始部挨拶	5	(14)	友人同士	3名～5名
	初対面場面での自己紹介	2～5	(12)，(13)	知り合い	3名
	終了部挨拶	2	(15)		3名
自宅	初対面同士の開始部終了部挨拶と雑談	41～90	(16)，(17)	知り合い	2名～3名
	夫婦同士の会話	19	(20)	夫婦	2名
大学内	開始部挨拶	1～3	(31)，(34)，(36)	学友同士	3～4名
	先生に謝罪	1	(35)	学生と先生	2名
	開始部と終了部の挨拶・誘い	3～18	(29)，(30)	学生と大学スタッフ	3名
	パソコンのオーダー	13	(26)	後輩と先輩	2名

3.3 調査協力者

本調査で対象としたペルシア語母語話者は，筆者の知り合いあるいは，彼らに紹介してもらった知人である．また何名か，場面調査の際にたまたまその場面におり，その場で協力の依頼をした者もいる．協力者の日本での滞在期間は，7 年以上（中・長期滞在者）であり，日本語での日常会話が十分にでき，さらに日本社会の儀礼的な振る舞い（待遇表現など）に関しても意識あるいは理解を持っている（このことは口頭インタビューの結果から分かる）者を対象にした．

協力者の年齢層は比較的広く，20 歳代から 50 歳代である．また協力者それぞれの日本語習得の状況が様々であることは彼らの言語使用を考える際に重要な要素である．彼らの来日目的は様々であり，これが彼らにとって第二言語である日本語の習得状況に影響していることが見受けられた．本調査では，協力者の 56%（9 名）が日本語を日常生活の中で自然に習得した者（自然習得者）であり，残りの 44%（7 名）は，日本語を文法の基礎から学習した者（学習者）となる．そのうち 1 名は日本語能力が初級レベルであったため，ペルシア語母語話者の通訳を通して日本語母語話者と会話をしている．そして，3 名の協力者(PR(02),PR(03),PR(08))に関しては，職業内容を明らかにしなかったことから，職業の欄は「―」で示している．協力者の詳細は下の通りである．

表 2： 協力者の詳細

発話者記号	参加会話番号	年齢	性別	職業	日本滞在歴	日本語習得状況	日本語能力
PR(01)	(8), (11), (16), (17)	40代	男	介護士	20年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：中級
PR(02)	(18) , (19)	40代	男	―	18年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：中級
PR(03)	(18), (19)	40代	男	―	10年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：初級
PR(04)	(1), (2), (3)	40代後半	男	経営者	21年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：初級
PR(05)	(4)	30代	男	英語教師	8年	自然習得者	話す・聞く：初級，読む・書く：ゼロに近い
PR(06)	(5), (6)	40代後半	男	経営者	25年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：中級
PR(07)	(7), (9), (10), (11), (12), (13), (15)	50代	女	主婦	9年	自然習得者	話す・聞く：中級，読む・書く：中級
PR(08)	(14)	40代半ば	男	―	15年	自然習得者	話す・聞く：上級，読む・書く：初級
PR(09)	(14)	40代	男	公務員	2年	自然習得者	ゼロに近い
PR(10)	(20), (21), (22), (23), (24), (25)	30代後半	女	大学助手	10年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(11)	(26), (29), (30)	20代後半	男	学生（博士課程）	7年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(12)	(29), (30)	20代後半	男	学生（博士課程）	7年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(13)	(6) , (9) , (27), (28), (6)	30代	女	学生（博士課程）	10年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(14)	(15), (31), (32), (33), (34), (35), (36)	30代	女	研究員	10年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(15)	(10)	30代	男	会社員	8年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級
PR(16)	(12), (13), (14), (15)	30代	男	学生（博士課程）	9年	学習者	話す・聞く：上級，読む・書く：上級

3.4 分析の枠組み

本調査での分析の枠組みでは，発話上での相互行為が最終的に儀礼的な行為を成立させているのかどうかを検討できる要素に注目した．

ペルシア語母語話者の儀礼的場面において重要な役割を持つのが，多様な発話機能の表出と隣接ペアの表れである．そこには表現選択要素が多く存在しており，彼らは自分と相手とのフェイスを侵害しないための言語行動にいっそう気を配り，言葉を選択していることが明らかになった（アキバリ 2016）．

特に発話機能（Speech function）は，「談話」の認定に関わる重要な分析観点であると考えられる（ザトラウスキー1993）．本研究では，多様な発話機能を大きく「基本的儀礼発話機能[ii]」と名付けた．基本的儀礼発話機能では，「挨拶-感謝-褒め-誘い-提供-依頼-謝罪-願望（祈り）-申し出」の 9 つの発話機能が挙げられる．この種類の発話機能は，対人的コミュニケーション機能（Malinowski 1923）の役割を持ち，儀礼的相互行為の場面で聞き手と話し手の共同的な行為の中で「社会的つながり」の役割を果たしている．「挨拶

的定型表現」や「決まり文句的表現」はこの一種であり，形式的な発話機能であると言える．表 3 は，談話内での，それぞれの儀礼発話機能の定義である．

基本的儀礼発話機能の種類と定義に関しては，筆者の主観的判断の妥当性を補うために，高度な日本語能力を持つ 2 名のペルシア語母語話者にも第三者としてデータの会話を聞いてもらい，発話が儀礼的な役割を果たしているかどうかを判断してもらった．また，基本的儀礼発話機能の枠組みにおいてもう一つの重要な視点は，発話連鎖の表れである．筆者は以前の研究（アキバリ 2015）にて，それぞれの発話機能においてペルシア語母語話者の儀礼的な相互行為においては，隣接ペア（adjacency pair） の第一成分と第二成分から成り立つ，発話連鎖が続く傾向があることを明らかにした．串田（2006）は複数の発話タイプの間に何らかの「連鎖的（Sequence）」関係があるとき，その発話タイプのセットを「連鎖組織(Sequence organization)」と総称し，「連鎖的」関係とは，複数の発話が単に連続的に表れているというだけではなく，それらの間に何らかの規範的つながりへと振る舞いを方向づけることが可能であると指摘する．そこで，本研究でも，個々の発話での発話機能だけではなく，談話全体の発話連鎖も儀礼行為の重要な要素として捉え，分析する．

表 3： 基本的儀礼発話機能の定義

種類		発話機能の定義
基本的儀礼発話機能	挨拶	①どの状況の下でも挨拶（相手と会うことで儀礼的に交わす言葉や行動）が見られた箇所は儀礼的行為としてみなす ②相手の健康を尋ねる
	感謝	①どの状況の下でも感謝が見られた箇所は儀礼的行動としてみなす ②自己に対する好意や親切さのありがたさをを言葉で相手に述べる
	褒め	①相手の領域に属する物・人物を敬い、尊重する言語行動 ②会話内容の連鎖から見て相手を褒める必要がないところで相手の発話者を喜ばせる、あるいは相手の顔を立てる役割をもつ
	誘い	①自己の領域に相手を誘う言語行動 ②会話終了部で相手を自宅に招待する
	提供	①相手から要求されていないものの、私物あるいは食べ物を相手に与える ②相手への負担を軽減するために何かを与える
	依頼	①何か用件を相手に頼む際に、負担を求めることを申し訳なく思う気持ちを添えてお願いする
	謝罪	①実際に自分が何の罪を犯していなくても、自分の行為が相手への負担になったことを想定し、謝る
	願望	①相手の健康や成功を祈る言葉を発する
	申し出	①相手のために何らかの行為をする意思を表明する ②相手のために何かを行動に移したい意思を表明する

4. 調査結果と考察

4.1 接触場面における基本的儀礼発話機能の量的分析

本節では，ペルシア語母語話者と日本語母語話者による各場面での会話全体において，発話機能別に儀礼的な発話文の使用率を集計した．ここでは，一発話を一単位としてカウントしている．

4.1.1 各場面の会話全体における基本的儀礼発話機能の割合

まず本稿では，儀礼場面での相互行為に影響力が高いと考えられる「関係性」と「場面性」という観点から儀礼場面の分類を行った．本データの特徴は，多様な場面における会話を録音したことである．自宅での家族会話，レストランにおける友人や客との会話，フリーマーケットでの会話，大学内での先生，事務職員，学友との談話などが含まれている．場面性は大きく「公的な場面」と「私的な場面」に区別した．各場面における会話全体での基本的儀礼発話機能の割合を表 4 に示す．

儀礼的発話機能の割合から，そのうちの何割をペルシア語母語話者そして何割を日本語母語話者が発話していたのかを明らかにした．儀礼的な相互行為が期待される場面にも関わらず，会話番号（12），（13），（18），（36）では儀礼的と定義づけられる発話行為が一切見出されなかった．一方，会話番号（28），（4），（34）においては，会話全体の 5 割で儀礼的な相互行為が見られた．これらの場面では，参加者の社会的役割が明確化されているものと，特に互いに社会的責任や役割がないものという相違点がある．特に日本語母語話者は，公的な場面で業務上の社会的役割がある場面においては，儀礼的なやり取りの頻度が高くなっていると言える．

表 4： 場面において会話全体に見られる基本的儀礼発話機能の表出

分類	調査場面	場面特徴	会話番号	関係性	会話全体における基本的儀礼発話機能の割合	ペルシア語話者の基本的儀礼発話機能の割合	日本語話者の基本的儀礼発話機能の割合
公的場面	スーパー	食べ物提供	会話 1	知り合い：JS↔PS	5.00%	3.75%	1.25%
		行きつけの店で会話１（開始部と終了部の挨拶など）	会話2	店員：JS, 客：PS	9.52%	7.94%	1.59%
		行きつけの店で会話２（開始部と終了部の挨拶など）	会話3	店員：JS, 客：PS	9.83%	4.62%	5.20%
		レジでの会計中の談話1	会話27	店員：JS, 客：PS	30.00%	12.00%	18.00%
		レジでの会計中の談話2	会話28	店員：JS, 客：PS	50.00%	43.75%	6.25%
	レストラン	料理の注文（１）（初対面同士）	会話4	ウェートレス：JS, 客：PS	50.00%	40.00%	10.00%
		料理の注文（2）（常連客）	会話19	ウェートレス：JS, 客：PS	9.09%	0.00%	9.09%
		国際カップルとレストランスタッフの会話	会話10	客：JS,PS, ウェートレス：PS	24.00%	20.00%	4.00%
		友人と開始部挨拶	会話8	友人：JS↔PS	1.92%	1.92%	0.00%
		常連客との挨拶（1）	会話5	客：JS, オーナー：PS	22.22%	15.87%	6.35%
		常連客との挨拶（2）	会話18	客：JS,PR, オーナー：PS	0.00%	0.00%	0.00%
		初対面の者同士の自己紹介	会話6	客：JS,PS, オーナー：PS	12.50%	11.25%	1.25%
		客がレストランスタッフを褒める	会話7	客：JS, ウェートレス：PS	17.65%	5.88%	11.76%
	展示会	展示会での値段の交渉	会話11	店員：JS, 客：PS	11.84%	9.21%	2.63%
	フリーマーケット	客が値段を聞き、店員が商品について説明をする（1）	会話21	客：JS, 店員：PS	18.75%	6.25%	12.50%
		客が値段を聞き、店員が商品について説明をする（2）	会話22	客：JS, 店員：PS	2.56%	0.85%	1.71%
		ブースを隣にもつもの同士の会話	会話23	出店者：JS↔PS	13.46%	5.77%	7.69%
		開始部と終了部の挨拶（友人と）	会話24	友人： JS↔PS	9.46%	4.73%	4.73%
		クレームを言う	会話25	責任者：JS, 出店者：JS,PS	13.79%	3.45%	10.34%
	クリニック	診察室で、患者から医師への病状説明・終了部の挨拶（1）	会話32	医師：JS, 患者：PS	14.08%	7.04%	7.04%
		診察室で、患者から医師への病状説明・終了部の挨拶（2）	会話33	医師：JS, 患者：PS	0.93%	0.93%	0.00%
	チャリティーバザー	ホストとゲストが会う際の開始部の挨拶	会話14	ゲスト：JS, ホスト：PS	28.81%	20.34%	8.47%
		初対面での短い挨拶	会話12	参加者：JS↔PS	0.00%	0.00%	0.00%
		初対面の者同士の雑談（1）	会話13	参加者：JS↔PS	0.00%	0.00%	0.00%
		初対面の者同士の終了部の挨拶	会話15	参加者：JS↔PS	40.00%	36.00%	4.00%
	研究室内	友人同士（1）	会話34	学友：JS↔PS	50.00%	37.50%	12.50%
		友人同士（2）	会話36	学友：JS↔PS	0.00%	0.00%	0.00%
		大学研究室での会話	会話31	先輩：JS, 後輩：PS	2.74%	2.74%	0.00%
		先生に謝罪する	会話35	先生：PS, 学生：JS	16.67%	16.67%	0.00%
		事務職員との会話（1）	会話29	事務職員：JS,学生：PS	8.16%	7.14%	1.02%
		事務職員との会話（2）	会話30	事務職員：JS,学生：PS	11.40%	6.14%	5.26%
		パソコンのオーダー	会話26	学友：JS↔PS	4.48%	2.99%	1.49%
私的場面	近所同士	開始部と終了部の挨拶・褒め・感謝が表れる	会話9	友人：JS↔PS	30.28%	18.31%	11.97%
	自宅	初対面の者同士の開始部と終了部の挨拶と会話（1）	会話16	初対面者同士：JS↔PS	21.25%	15.38%	5.86%
		初対面の者同士の開始部と終了部の挨拶と会話（2）	会話17	初対面者同士：JS↔PS	16.95%	14.41%	2.54%
		夫婦同士の会話	会話20	夫：JS, 妻：PS	1.12%	1.12%	0.00%

4.2 基本的儀礼発話機能の使用頻度による分析

場面や会話参加者の関係性により，形式化された発話はどのようなストラテジーで用いられ，どのような場面でなされるのかを各発話者の使用頻度率により分類し明らかにする．ここでは，それぞれの会話参加者の基本的儀礼発話機能の使用頻度により，4 つのグルー

プに分類することができた．表 5 は，各グループの分類と，グループに属する会話番号を示したものになる．また，場面における会話参加者の「関係性」と会話が行われた「場面性」の数も見られる．

表 5：　会話参加者の儀礼的発話機能による儀礼的場面の分類

グループの分類	会話番号	関係性(数)		場面性(数)	
		長期	初対面	公的	私的
ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能が日本語母語話者より多い場面	{4},{28},{15},{35},{6},{29},{34},{1},{33},{14},{31},{2},{9},{26},{8},{11},{20},{5},{30},{10},{17},{16}	11	11	19	3
日本語母語話者の儀礼的発話機能がペルシア語母語話者より多い場面	{19},{25},{27},{7},{23},{22},{3},{21}	2	5	8	—
ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的発話機能の使用頻度が等しい場面	{32},{24}	2	—	1	1
儀礼的発話機能が見られなかった場面	{12},{36},{13},{18}	2	2	4	—

表 5 の結果から，総じて長期的な付き合いを持つ者同士が儀礼的発話機能を使う傾向が高いことが明らかになった．以下では，それぞれの特徴を分析する．

4.2.1 ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能が日本語母語話者より多い場面

まず初めに，会話参加者のペルシア語母語話者が日本語母語話者より儀礼的な発話機能を多く表出する場面での特徴を見ていきたい．図 1 は，ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能が多く見られた 22 の場面における，ペルシア語母語話者と日本語母語話者の基本的儀礼発話機能の使用頻度を比較したものである．

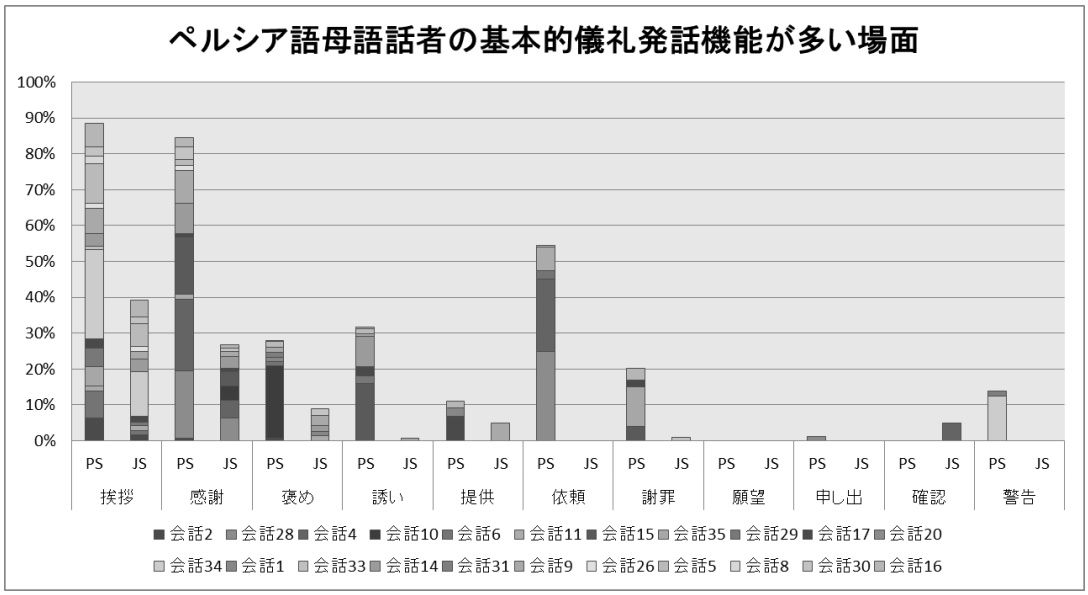

図 1：　ペルシア語母語話者の基本的儀礼発話機能が多い場面の発話機能の種

上の図から，ペルシア語母語話者が多く使用していた儀礼的言語行動は，「挨拶」，「感謝」，「依頼」，「誘い」，「褒め」，「謝罪」，「警告」，「提供」の順であることが分かった．接触場面では以上の発話機能以外にも，ペルシア語母語話者の母語場面では見られなかった「警告」が儀礼的な役割をもつ機能として見られた．一方，ペルシア語母語

話者と比較して儀礼的調整が少なかった日本語母語話者は，「挨拶」,「感謝」,「褒め」,「確認」の順で儀礼を提示していた．「挨拶」，「感謝」，「褒め」の発話機能は，両発話者によって活用されているケースが多く見られた． しかし「依頼」,「謝罪」,「誘い」,「警告」はほぼペルシア語母語話者のみ，そして「確認」は日本語母語話者のみによって発話されていることが分かる．その中でも特に「誘い」は，ペルシア語話者の母語場面でも多く表出しており（アキバリ印刷中），これには母語規範の転移が影響しているとも言える．ペルシア語母語話者との交流が多い複数の日本語母語話者からのインタビュー調査では，「ペルシア語母語話者の誘いが本気なのかどうかわからない」，「この誘いが儀礼上（ターロフ）の誘いであるかどうかをどのように見極めればよいのか」という声が挙げられていた．中には，儀礼上の誘いを本気に捉え，誘われた相手の家を実際に訪れたという日本語母語話者の例も見られる(アキバリ 2015)．したがって，ペルシア語母語話者の実質的な誘いといわゆる，ターロフ場面で多く使用される，儀礼的な誘いでの区別が発話上あまり適切に調整できていないことも，分析から考えられる．表 6 は，どのような関係性や状況の下でペルシア語母語話者がより儀礼的な発話機能を表出しているのかを示す．付き合いが長期的であるほど，「挨拶」の使用頻度が高くなり，発話での儀礼連鎖が見られる．また，ペルシア語母語話者より，社会的な立場が上の者に対し，儀礼的な「謝罪」を用いている．そして，どのような関係性においても，相手から何かを要求する状況では，儀礼的な発話機能の種類が増える．従って，相手の発話者との社会的な立場・関係性の長さ・場面での状況が，発話機能の種類やその使用頻度に影響していることが分かる．

表 6:　ペルシア語母語話者がより儀礼的行動を見せる場面の[iii]

PSから見たJSの社会的立場	状況	付き合い	PSの儀礼発話機能種類	儀礼連鎖
ⅰ．教師・事務員スタッフ・医者・先輩	PSより目上	長期的	挨拶(1%～5%),謝罪(11%),誘い(2.04%)	あり
ⅱ．店員	相手から何か要求する	初対面・長期的	挨拶(5%),感謝(1%～20%),依頼(7%～25%),褒め(1%)	あり
ⅲ．公共の場で友人経由で知り合った人	自己紹介場面・一定の時間、同じ場を共有する	初対面	挨拶(2%～8%), 感謝(1%～16%),依頼(2.5%),謝罪(2%～11%)	あり
ⅳ．店の客	来店客との会話	初対面	挨拶(1%),褒め(1%～20%),	なし
ⅴ．学友・友人	開始部と終了部の挨拶と前後の会話	長期的	挨拶(～25%),感謝(～9%),褒め(1%～3%),誘い(1%),警告(～13%)	あり
ⅵ．夫	夫の負担を軽減する	長期的	申し出(1%)	なし

下の事例は，客であるペルシア語母語話者と日本人店員の会話例である．この例はペルシア語母語話者が儀礼的な調整を多く使用していることを示す．

【事例 1：会話場面 4】

ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的儀礼発話機能
1	PR(05)	スープコーンは二つ。	
2	JP(01)	お二つはい。	
3	PR(05)	お願いしま～す。	依頼
4	JP(01)	はい。	
5	PR(05)	グラタンは、ひと＜つ＞{＜}，，	注文
6	JP(01)	＜おひとつ＞{＞}ですね、はい。	
7	PR(05)	ステーキは、えーと、どこですか、＃＃。	
8	JP(01)	ステーキですね。	
9	PR(05)	ステーキ。	
10	PR(05)	ステーキがえび。	
11	JP(01)	あっ、えび＃＃つきですね、はいこちらの。	
12	PR(05)	お願いします。	依頼
13	JP(01)	はい。	
14	PR(05)	お願いしま～す。	依頼
15	PR(05)	ライスは、えー、普通。	
16	JP(01)	普通のライスですね。	
17	PR(05)	普通のライスですね。	
18	JP(01)	以上でよろしいですか、＜少し間＞はい、ありがとうございます。	
19	PR(05)	ありがとうございます。	感謝
20	PR(05)	ありがとうございます。	感謝

レストランの来客者である PR（05）は，ウェートレスの JP（01）に対して依頼（食事の注文）をする際に「お願いします」の発話を 3，12，14 行目で連鎖的に繰り返している．また 16 行目において PR(05)は，JP（01）が注文されたメニューを「確認」する発話を受け，17 行目でそれに呼応する．ここで PR(05)は 15 行目で言及した注文内容を繰り返している．続いて JP（01）は 18 行目で，「以上でよろしいですか」と PR(05)に一度確認を要求するが，PR(05)からの応答がないことから，肯定的な応答として捉え，少しの間をおいてから「ありがとうございます」と感謝をし，発話を終了させている．一方，19 行目と 20 行目では，PR（05）が一度「ありがとうございます」と感謝を示す（19 行目）ものの，JP（01）から期待の応答がなかったことから，最後に「ありがとうございます」（20 行目）と感謝を繰り返し述べる．なぜならば，ペルシア語母語話者の儀礼的な相互行為においては，「感謝」が見られた場合，隣接ペアの第二成分として「感謝」が見られる傾向があることから（アキバリ 2016），母語規範の転移として「感謝」を期待していたことが考えられる．この儀礼的フレームでは，ペルシア語母語話者が客という立場でありながらも，店員に何かを要求することから，儀礼的な発話機能を何度も繰り返している．ようするに，3，12，14 行目では儀礼的な「依頼」の繰り返し，19，20 行目では，「感謝」の繰り返しがみられる．従って，「多くの儀礼的発話機能が見られる」とは，発話機能の種類ということではなく，2 つの儀礼的機能の繰り返しが多いといことが指摘できる．

4．2．2 日本語母語話者の儀礼的発話機能の方がペルシア語母語話者よりも多い場面

8 つの場面において，日本語母語話者の儀礼的な発話機能の表出がペルシア語母語話者を上回っていた．これらの場面では，10%に近い儀礼的な機能を日本語母語話者が表出しているのに対し，ペルシア語母語話者は 6%弱しか儀礼的な発話機能を表出していない．図 2 は，日本語母語話者の儀礼的言語行動が多く見られた 8 の場面における，日本語母語話者とペルシア語母語話者の基本的儀礼発話機能の使用頻度を比較したものである．

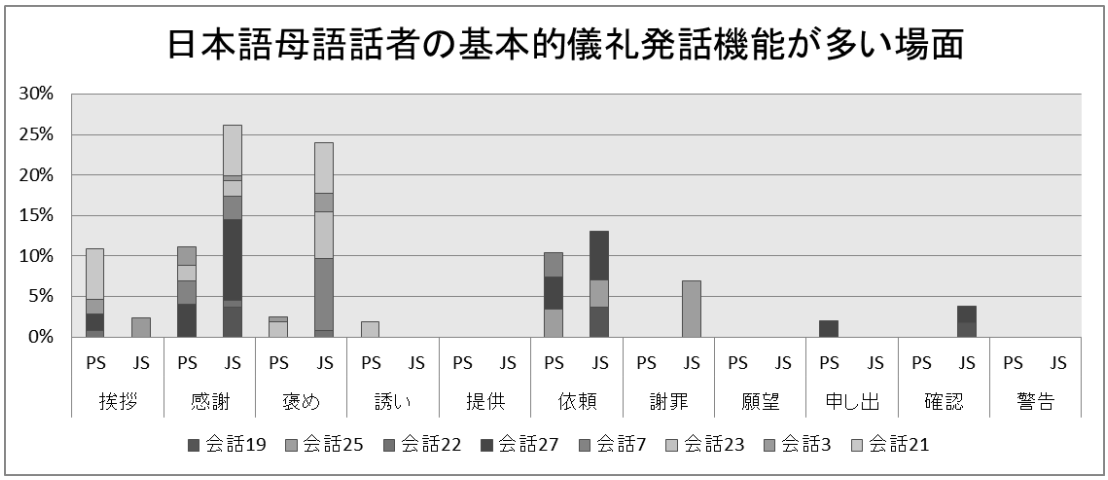

図 2： 日本語母語話者による基本的儀礼発話機能が多い場面の発話機能の種

基本的儀礼発話機能においては，「感謝」と「褒め」が日本語母語話者に圧倒的に活用されていた．特に，感謝はレジでのお会計場面や日本語母語話者が店員として客に接する場面において，多く見られた．また，儀礼的フレームにおいて，日本語母語話者が初対面相手のペルシア語母語話者に対して，「褒め」を多く使用していることが分かった．「褒め」の種類としては，相手の日本語や相手のスカーフ[iv]を褒めるなど，相手との会話を開始する際に儀礼的な褒めが多く活用されていた．これらの褒めは，場面における会話の流れから，必ずしも，そこで提示が必要と考えられないが，ペルシア語母語話者に対する，気配りあるいは，相手のフェイスを保持するための儀礼的なストラテジーとして解釈できる．但しこれらの「感謝」と「褒め」に関しては，収集した会話データの種類が特殊であったこともあり，会話全般には言えないと考えられる．また，「挨拶」に関しては， 4 つの場面においてペルシア語母語話者が発話するものの，日本語母語話者からは，「いらっしゃいませ」のような挨拶が，ひとつの場面でのみ考察された．このグループにおいても，「誘い」と「申し出」の基本的儀礼発話機能をペルシア語母語話者のみ，そして，「確認」の発話機能を日本語母語話者のみが表出していた．

表 7 にあるように，日本語母語話者は特に相手に対して，社会的な役割として責任が問われている場面で，儀礼的な言語行動を多く提示する．また，提供されたものを褒める，あるいは，ペルシア語母語話者の日本語や外見を褒めるなどという儀礼的な調整も多く見られた．このような「褒め」に対してペルシア語母語話者は，儀礼的に拒否をし，あるいは，

感謝をしてすぐ受け止めるなど，多様な応答が見られた．また，いずれの場面においても，儀礼的な連鎖は見出されなかった．

表 7： 日本語母語話者がより儀礼的発話機能を表出する場面の特徴

JSから見たPSの社会的立場	状況	付き合い	JP話者の儀礼発話機能種類	儀礼連鎖
ⅰ.客	社会的責任の任務	長期・初対面	感謝(1%～4%),依頼(3.5%),謝罪(7%),確認(2%),褒め(1%)	なし
ⅱ.店員	フェイスの維持	初対面	感謝(1%),褒め(1%)	なし

以下は，ペルシア語母語話者である PR(10)が，イランからのハンドメイド商品を売るために初めて出店したフリーマーケットにおいて，客である JP（02）と交渉をしている場面である．このような交渉場面は，ペルシア語母語話者の母語場面であれば，店員と客の間で多くの儀礼的発話機能が見られる（アキバリ 2016）．そこで，本稿では接触場面においての，ペルシア語母語話者の儀礼的調整を見ていきたい．

【事例 2：会話場面 22】

ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的儀礼発話機能
1	PR(10)	いらっしゃいませー。	挨拶(歓迎)
2	JP(02)	これは？。	
3	PR(10)	イランの手作りです。	
4	JP(02)	うーーん。	
5	PR(10)	全部ハンドメードで。	
6	JP(02)	うーーん。	
7	PR(10)	これ、コーヒーのマッグでー。	
8	JP(02)	ねーかわいい。	褒め
9	PR(10)	レンジでも大丈夫です。	
10	JP(02)	うーーん。	
11	PR(10)	ペインティングは手でやってたんでー。	
12	JP(02)	へーー。	
13	PR(10)	でも、水飲んだほうが、いいかもね、青だから夏でー。	
14	JP(02)	うんうんん。	
15	PR(10)	気分ね(笑)。	
16	JP(02)	: :ありがとうございます。	感謝

1 行目では，PR(10)が「いらっしゃいませー」と日本語の規範に合った歓迎の挨拶を JP(02)に提示しているものの，それ以降は儀礼的と定義づけられる発話機能は見られない．「イランの手作りです」（3 行目）と「レンジでも大丈夫です」（9 行目）の発話以外のすべての文末においても，動詞の省略が見られた．一方，懸命に商品について説明をしている PR（10）に対して JP（02）は，「うーーん」，「へーー」などのうなずきで応答をしている．しかし，8 行目では，「ねーかわいい」と「褒め」を提示することで儀礼の行動に出て，PR（10）のフェイスを侵害しないように努めている．16 行目には，「ありがとうございます」と形式的な感謝表現を用いて交渉の場のフレームを終了させる意思を表明している．ここでは，連鎖組織の中での儀礼的連鎖は見られなかった．

4.2.3 ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的発話機能の使用が等しい場面

本調査では，2 つの会話においてのみ，両言語母語話者の基本的儀礼発話機能の使用頻度が等しかった．それぞれの会話では，同頻度で「挨拶」，「感謝」，「褒め」という儀礼的な調整が見られたものの，活用された発話機能の種類には相違が見られた．「誘い」と「謝罪」は日本語母語話者に，「依頼」はペルシア語母語話者によって多く活用されていた．図 3 は、両発話者の基本的儀礼発話機能が等しい 2 つの会話に見られた，日本語母語話者とペルシア語母語話者の基本的儀礼発話機能の使用頻度を比較したものである．ここにおける使用頻度の等しさとは，ペルシア語母語話者と日本語母語話者がその会話で使用した儀礼的発話機能の数を示す．ようするに，会話における儀礼的発話機能の種類の選択やその発話機能を使用する回数では異なりが見られるものの，儀礼的発話機能を提示する回数は等しいということである．従って，図 3 のグラフでは，両発話者の各儀礼的発話機能での使用頻度数は等しく見られないが，総合的に等しい数で儀礼を提示していることが指摘できる．

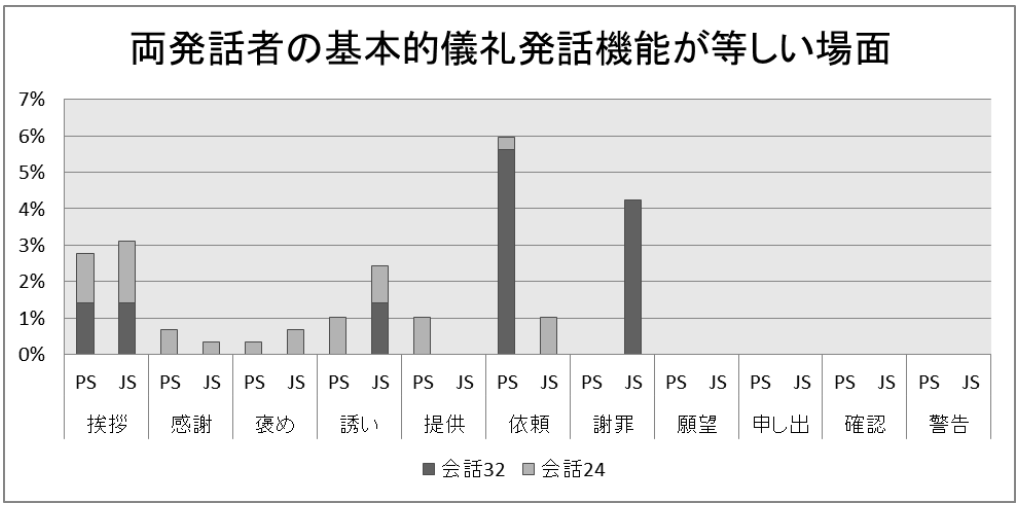

図 3： 両発話者の基本的儀礼発話機能が等しい場面

このグループでは，発話者の関係性が長期的なものであり，会話参加者の発話連鎖組織の中の「隣接ペア」が成り立っていることが指摘できる．その理由としては，どちらかの発話者により儀礼的な発話機能が見られた場合に，もう一方の発話者が儀礼的な応答をしていたからである．しかし，その儀礼的な応答が必ずしも次の発話に出るとは限らない．このような場面における，会話の特徴としては，どちらかの発話者のみが多く儀礼的な発話行為をするといったような，かたよりが見られない．

表 8 からも見られるように，長期的な付き合いがある友人同士の会話では，儀礼的なフレームが明確化されていることが会話データから分かる．なぜならば，儀礼的なフレームに入る前の会話段階において，Goffman が述べる，フレーム交換の境界における予告の合図が見られるからである．例えば，長期的な付き合いがある友人同士の会話の場合は，一人の発話者から儀礼的な「誘い」が開始されることで，誘い場面のフレームに入ったことが認識され，それに対して他の発話者から応答と誘いの連鎖が見られる．

次に儀礼的な発話機能の頻度が等しかった場面は，診療場面での医師と患者の相互行為場面であった．ここでは，患者であるペルシア語母語話者が日本語母語話者である医師に何かを依頼する際に，「お願いします」と儀礼的な形式表現を述べていた．一方で，医師

は患者に触れる前に，儀礼的な調整として，「ごめんなさい」と謝罪を何度も繰り返していた．各発話者による儀礼的な発話機能の種類が異なるものの，自分の社会的立場をきちんと理解した上で儀礼を提示していることが見られた．

表 8： ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的行動が等しい場面

PSとJSの関係性	状況	付き合い	PSの儀礼発話機能種類	JSの儀礼発話機能種類	儀礼連鎖
ⅰ.友人同士	儀礼フレームが明確化されている・段階的に儀礼場面に入る	長期的	挨拶(1%),感謝(1%),誘い(1%),提供(1%)	挨拶(2%),褒め(1%),誘い(1%),依頼(1%)	あり
ⅱ.患者と医師	診療場面での相互行為 (社会的役割関係)	長期的	挨拶(1%),依頼(6%)	挨拶(1%),誘い(1%),謝罪(4%),	あり

以下の事例 3 は，友人の関係であるペルシア語母語話者 PR（10）と日本語母語話者 JP(05)による、「誘い」が見られた場面である．妻 PR(10)が夫の JP（06）とフリーマーケットでブースを置き，そこに PR（10）の友人の JP(05)と夫の JP(07)が訪れたときに以下のような会話が行われた．

【事例 3：会話場面 24】

ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的儀礼発話機能
139	PR(11)	今、家をマンション探してるから、＜M＞さんにも相談したかったけどね。	
140	JP(06)	そうすると、うち＜にね＞｛＜｝, ,	誘い
141	PR(11)	＜お茶＞｛＞｝を一緒に。	誘い
142	JP(06)	ぜひ。	誘い
143	PR(11)	しよう。	
144	JP(05)	ねー。	
145	JP(07)	川崎にも来てください。	誘い
146	PR(11)	川崎にも行きたい。	

事例 3 では，139 行目で PR（11）が家を探している話題を提供している．そこで，PR(11)の夫である JP（06）が「そうすると、うち＜にね＞｛＜｝」と家への誘いの合図を提示する（140 行目）．ようするに，マンションの購入について改めてゆっくりお家で話すことを提案している．それに続き PR（11）が 141 行目で JP(06)の話を区切るように「＜お茶＞｛＞｝を一緒に」とより詳細に「誘い」の発話機能を提供している．142 と 143 行目でも引き続き PR(11)と JP(06)が誘いの連鎖を続ける．次に，PR(11)の友人である JP（05）が「ねー」と改めて会うことに同意を示す(144 行目)．PR（11）と JP（06）の「誘い」に対して，JP（05）の夫である JP（07）も「川崎にある自宅にも来てください」と儀礼的な「誘い」を提示する（145 行目）．その誘いに対し，PR(11)は「行きたい」と強くいきたい意思を表す．この会話では，誘いという儀礼的なフレームで，隣接ペアの「誘い―承諾」がうまく成立していることが考えられる．

4.2.4 儀礼的発話機能がみられなかった場面

本調査の 4 つの会話では，儀礼的発話機能の表出が期待されるにも関わらず双方から何の形式化された敬意的な発話機能が見られなかった．このグループの特徴として，会話開始部の挨拶が省略されていることが挙げられる．会話の開始部と終了部において，儀礼的な発話連鎖の表出が重視されている（吉枝 1994；アキバリ 2015）ペルシア語母語話者の社会では，挨拶が見られない相互行為は相当不自然か，または失礼な印象を与える．しかし，

ここでは挨拶が省略されており，いきなり会話の命題から入っている．一方，表 9 の ii では,ペルシア語母語話者が何の前置きもなく,突然自分に関する話題を提供し始めている．

表 9： 儀礼的言語行動が見られなかった場面の特徴

JSから見たPSの社会的立場	状況	付き合い	PSの儀礼発話機能種類	儀礼連鎖
i．常連客・公共の場で初めて会話をする客	挨拶の省略・自分に対する話題提供	長期・初対面	―	―
ii．学友	挨拶省略	長期	―	―

以下の会話場面 22 では，PR(16)と JP(04)は以前からの知り合いであり，PR(07)はこの会話の数分間前に JP(04)と知り合いになったばかりの人物である．ここで会話の終了部において PR(07)が突如新しい話題を提供したことで，会話場面の逸脱を招いている．この事例では，ペルシア語母語話者から儀礼的な発話機能が見られなかった．

【事例 4：会話場面 22】

ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的儀礼発話機能
7	PR(16)	また、イランにも行った？。	
8	JP(04)	いや～、2回前、あ～2年前最後。	
9	PR(16)	最後に、一緒に会ったときに。	
10	JP(04)	あっ、会った時が最後、うんうんうん。	
11	PR(07)	私の家族。	
12	JP(04)	え～。	
13	PR(07)	息子～。	
14	JP(04)	うんうんうん。	
15	PR(07)	旦那さん。	
16	JP(04)	へ～。	
17	PR(07)	ゆめさん。	
18	JP(04)	あ～ゆめ。	
19	PR(07)	孫。	
20	JP(04)	孫さん(〈笑〉)うんうんうん。	
21	PR(07)	前、遊びに日本。	
22	JP(04)	あ～～。	
23	JP(04)	Disney ランドRaftin？。	
24	PR(07)	はい。	
25	JP(04)	え～～。	
26	PR(07)	これも、日本人の20歳。	
27	JP(04)	あっ、成人式のはい、うんうんうん。	
28	PR(07)	綺麗、私え、すごい綺麗。	
29	JP(04)	すごい綺麗。	
30	PR(07)	あっ、はい。	

PR(07)は，10 行目の JP(04)の「うんうんうん」のうなずきを，9 行目の PR(16)との会話終了の合図として認識している．そこで三人目の話者である PR（07）が突然，何の前置きもなく，11 行目の発話で自分の家族写真を JP(04)に見せ始める．相手に自分の家族についての話題を提供し，相互行為を開始したいが，それをどのような展開で進行させればよいのか分からず，そこから逸脱が生じていると考えられる．また，ペルシア語母語話者の母語規範に照らし合わせると，自分についての情報を提供した際には，相手からの「褒め」が期待される．しかし，JP(04)は提供された話題にどのように反応してよいか戸惑い，「へ

～」，「あ～」という応答しか見せていない．最終的には，28 行目で PR(07)自ら，「綺麗，私え，すごい綺麗」と写真に写っている自分自身を綺麗であると述べ，自らの写真を褒める．29 行目で， JP（04）が「すごい綺麗」と繰り返したことに，PR(07)は 30 行目で「あっ，はい」と声を高くして応答をしていた．JP（04）からの「褒め」をもらった PR(07)はそこで初めて儀礼的な隣接ペアが成り立ったかのように場面を解釈し，そこで会話が終了する．

5. まとめと今後の課題

本稿では，収集された会話データをもとに，日本に中長期滞在中のペルシア語母語話者の儀礼場面における言語行動に注目した．日本語母語話者との接触場面での相互行為内において，双方の基本的儀礼発話機能の表出頻度から分析・考察を試みた．分析においては，各場面でペルシア語母語話者と日本語母語話者のどちらの発話者が多く儀礼的な発話機能を示しているのかにより，大きく 4 つのグループに分類することができた．また，それぞれの場面における特徴と結果の経緯を考察した．本調査の結果，以下の示唆と課題を得ることができた

(1)　基本的儀礼発話機能の量的な分析から，多様なバリエーションの発話機能が接触場面内で表出していることが指摘できる．しかし，必ずしも全ての場面において儀礼的な発話機能が見られるとは限らない．本調査の結果から，36 場面中，61 %の場面ではペルシア語母語話者が儀礼的な発話機能を多く使用していた．一方で，22%の場面においては，日本語母語話者の儀礼的な言語調整が多く見られた．それに続き，5%の場面では両言語話者が同じ頻度で儀礼的な発話機能を使用している．それに対して 11%の場面では，儀礼的な発話機能が一つも見られなかった．以上の結果から，相互行為において，ペルシア語母語話者の方が，儀礼的な発話機能を多く提示する傾向があることが言える．また，母語場面の会話では見られなかった「警告」のような，新たな儀礼的発話機能がペルシア語母語話者の接触場面で表出した．それに対し，儀礼的な母語場面では多く使われる「願望」の発話機能が日本語母語話者との会話では全く見られなかった．（プレースホルダー1）

(2)　ペルシア語母語話者の儀礼的な発話機能の頻度が高い場面は以下のように特徴づけられる．まず，ペルシア語母語話者は，先生や事務員スタッフ，医師や先輩など，自分より社会的立場が上の者に対し，儀礼的な「謝罪」を多く用いている．次に，相手の発話者に何かを要求する際には，特に店員に対して「感謝」や「依頼」の儀礼的な発話機能が多く見られた．また，パーティー場面のような初対面場面においても，ペルシア語母語話者から「感謝」が多く提示されており，そこには相手が初対面であるにも関わらず，会話の終了部では自宅に相手を誘うという，儀礼的な調整として「誘う」行為が見られた．このような談話の流れでは，母語場面での儀礼的規範からの転移が考えられる．それに加え，学友のような親しい間柄である人に対しても，ペルシア語母語話者は，「誘い」や「褒め」のような儀礼的な発話機能を表出させていた．

(3)　日本語母語話者の儀礼が多い場面においては，大きく二つの点が特徴として述べられる．一つは，社会的役割の中における，日本語母語話者のマニュアル的な儀礼の表示である．そこには，社会的責務として，「感謝」や「確認」のような，儀礼的な発話機能

が見られた．次に，ペルシア語母語話者のフェイスを侵害しないための儀礼的な調整が考察された．特に，「褒め」のストラテジーが多くの発話機能で提示された．

（4）　儀礼的な発話機能の生起数が両母語話者において互いに等しかった場面では，会話参加者の付き合いが長期的なものであることが見られた．特徴としては，儀礼的なフレームに入る直前の先行発話において，会話がスムーズに進行していたこと，また，儀礼的フレームに変換する合図が談話の中で見られている．

（5）　全く儀礼的な言語行動が見られなかった場面においては，会話開始部の段階に「挨拶」が省略されている．挨拶が省略されることで，そこからの言語行動においても，儀礼的な調整は見られない．

以上の分析では，ペルシア語母語話者と日本語母語話者の基本的儀礼発話機能の使用頻度を探ることができた．しかしよりミクロな視点からの考察としては，相互行為を行うペルシア語母語話者にも焦点を当てる必要性が考えられる．特にペルシア語母語話者の日本語の習得方法，そして日本における彼らの生活環境が目標言語である日本語での儀礼的な調整にどのような影響を及ぼしているのかを今後考察したい．マクロな結果につながる，ミクロな視点からの分析を今後の課題とする．

参考文献

アキバリ・フーリエ (2000). Taarof(ターロフ)場面における談話管理：ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面と内的場面の比較から 接触場面の言語管理研究 vol.12 接触場面における相互行為の蓄積と評価　千葉大学大学院人文社会文化科学研究科プロジェクト報告書　292 pp.55-65.

アキバリ・フーリエ (2016). ペルシア語母語話者同士の儀礼場面における談話管理―ターロフ場面を中心に― 千葉大学人文社会科学研究 第32号 pp.138-158.

アキバリ・フーリエ (印刷中). 日本語母語話者との接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動の管理―第三者視点による評価を参考に― グローバル・コミュニケーション研究所(GCI)紀要 第3号

袁帥(2012). 日中接触場面における「ほめ」－中国人母語話者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に 接触場面の言語管理研究vol.10 外来性に関わる通時性と共時性 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書248　pp.107-122.

Goffman , E.(1967) . Interaction Ritual: Essays on Face Behavior , Doubleday. An-chor Books.

――――― (1974). Frame Analysis: an Essay on the Organization of Experience, Harvard University Press.

徐孟鈴（2006）. 依頼会話の【終結部】の考察−日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイデータを比較して　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻言葉と文化第7号 pp.67-84.

ファン，S.K.(2003). 接触場面のタイポロジーと会話参加者の言語管理　国立国語研究所(編)　日本　語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成論文集 国立国語研究所

ファン，S.K.(2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題　国立国語研究所(編) 日本語教育の新たな文脈: 学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性 アルク

木村直美 (2008). 接触場面における日本語の語用論について～中国人、韓国人留学生のロールプレイによる談話分析～　山口国文 31号 pp.74-82.

串田秀也 (2006) . 相互行為秩序と会話分析「話し手」と「共―成員性」をめぐる参加の組織化 世界思想社

郭末任 (2002). 発話場面における相づちの変化―日韓両言語の母語場面と接触場面を比較した場合
日本文化学報 20号 pp.33-47

川上郁雄 (2006).「移動する子供たち」と日本語教育―日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える 明石書店

――― (2009).「移動する子供たち」との考える力とリテラシー―主体性の年少者日本語教育学 明石書店

加藤好崇 (2010). タイ-日の日本語接触場面における「誘い-断り」の発話行為 東海大学紀要 留学生教育センター30号　pp.29-41.

Malinowski，B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. In C.K. Ogden and I.A. Richards (eds.) *The meaning of meaning*. Routledge.

村岡英裕 (2016). 接触場面研究のパラダイム 村岡英裕他(編) 接触場面の言語学 母語話者・非母語話者から多言語話者へ ココ出版

中河伸俊・渡辺克典 (2015) . 触発するゴフマン　やりとりの秩序の社会学 新曜社

Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian- Japanese contact situations. In Pride. J. B. (Ed.), *Cross- cultural encounters: communication and miscommunication.* pp.44-84. Melbourne: River Seine.

ネウストプニー，J.V. (1995). 新しい日本語教育のために 大修館書店

大石 久実子 (1996).～(し)たいですか?」に代表される願望伺いについて--オ-ストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題　日本語教育第91号 pp.13-24.

尾崎明人 (1998). 異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育―コミュニケーション・ストラテジー研究の外観― 日本語教育通信 32号 pp.74-82.

ポリー・ザトラウスキー (1993). 日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察 くろしお出版

杉島敬志 (1997) . 承認と解釈―プラクティスとしての儀礼と社会のかかわり― 青木保他(編) 儀礼とパフォーマンス 岩波書店

Sacks，H. Schegloff, E. A. ，& Jefferson， G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*.50. pp.696-735.

サジーワニー，ディサーナーヤカ (2008). 家庭訪問における挨拶行動―日本語母語話者とシンハラ語母語話者の別れの場面の事例　接触場面の言語管理研究 Vol.6 言語生成と言語管理の学際的研究　千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 198 pp.47-52

嶋津百代 (2016). 創造性の視点から捉え直すインターカルチュラル・コミュニケーションの可能性―日本語学習者が考えるコミュニケーションのあり方―三牧陽子他(編) インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践 くろしお出版

谷智子他 (2016). 初対面からの縦断的会話データにみる相互行為的デフォルトの構築―ディスコースレベルのポライトネスの観点から―三牧陽子他(編) インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践 くろしお出版

Tambiah,S.J. (1985). Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective. Cambridge: Harvard University Press.

宇佐美まゆみ (2011). 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 2011年改訂版

吉枝聡子 (1994). Ta'arof研究の現状とその問題点―社会言語学的視点から― オリエント 37-1(19) pp.87-103.

楊昉 (2009). 意見の不一致における類型と調整ストラテジー―中国語母語場面と日中接触場面の事例分析 接触場面の言語管理研究Vol.7 多文化接触場面の言語行動と言語管理 千葉大学人文社会科学研究科プロジェクト報告書218 pp.65-85.

山本綾(2014). 英語話者と日本語話者の接触場面における誤解と不信および交渉 昭和大学 學苑 第888号 pp.13-23.

---

[i] 状況についての自分の見方を表現する言語的または非言語的行為でこれを通じて参与者に自分自身についての評価を表現する(Goffman1967:5).

[ii]「基本的」と命名したのは、ほかに「追加的」機能を想定しているからである．追加的儀礼発話機能が追加されることで，儀礼性がより強調される．

[iii] PS＝Persian Native Speakers, JS=Japanese Native Speakers

[iv] ここでのスカーフとは，イスラム教徒の女性が頭に巻くヘジャーブのことを指す.